
アデラード

市川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アデライド

【Nコード】

N9232Z

【作者名】

市川

【あらすじ】

聖エルンスト高等中学の正門前に着いたとき、父はエンゲルの手をついに離れた。短い旅の終点がきたのだった。離れてしまった手の間を、冬の風が冷たくふきぬけていった。いま、世界はあらゆる色を喪って、この親子の上に落ちかかってくるようだった。

(本文より)

序章

【0】

聖エルンスト高等中学の正門前に着いたとき、父はエンゲルの手をついに離した。

短い旅の終点がきたのだった。離れてしまった手の間を、冬の風が冷たくふきぬけていった。いま、世界はあらゆる色を喪って、この親子の上に落ちかかってくるようだった。

このとき、その一瞬の冷たさが彼にちよつとした悲しみや切なさをもたらししたが、それでも彼はかたくなに唇を引き結んでいた。何か言うことはしなかった。心にはとうにあきらめと絶望とが渦巻いていて、真冬の木枯らしのように吹き荒れていた。

いまや何を願ってもどうにもならないのだということを少年は知っていたし、断頭台のうえに引き立てられた囚人が、もはや泣こうがわめこうが首を切り離される運命にあるのだということに疑いがないように、自分の運命がこの白亜の正門のまえに投げ出されていることをも知っていた。それは、今たしかに目に見ることができた。取りだされたばかりのいけにえの心臓のように赤く、ほふられた子羊のようにくつたりとした、ちっぽけで、それでもある種のとうとさを持った、自分の運命というやつ姿だった。

「ここなの」

「そうだ」「低い声が答えた。「ここがそうだ」

父はずつとうわのそらで、うちを出てから一度もエンゲルの顔を見ようとはしなかった。今もそうだった。父の声はよそよそしく、ぎこちなかった。そむけたままの横顔にはびこっている無精ひげと、

耳の後ろにある二つのほくろが、いま、エンゲルに見える父の姿だった。

「中に入ったら、校長先生の部屋に行つて、その……話をするんだ。これからのことや、説明なんかを。わかるな？」

エンゲルは小さな声で「うん」と答えた。

本当はよく分からなかった。なにもわからなかった。それでも分からなければならないということ、あるいは分かったふりをしなければならぬということ、を分かつていたので、彼はそうしたのだ。運命の無慈悲な手に襟首をつかまれた者は、ただうなだれておとなしく言うことをきくほかに、できることなど何も無い。まっとうな人間に与えられうるすべての幸福な未来から自分たちは切り離されて、それだから今、ここにいるのだ。少年はそのことだけを知っていた。

父はそれから、重たくて擦り切れたコートのポケットをごそごとさぐり、何かをとりだして、エンゲルの手に握らせた。それはいくらかの小銭だった。父は穴のあいた手袋をしていた。

エンゲルが手の中のじゃらじゃらを見つめていると、父の手がのびてきて、かれのぼんやりした指を無理やり閉じさせた。そしてエンゲルの着ている新しい制服のポケットに突っ込んだ。エンゲルはずっと何も言わなかった。

父は溜息をついた。そしてエンゲルの正面にまわり、息子の両肩に手をのせた。こうして向き合つと、かれはとても久しぶりに父の顔を見た気がした。ぼさぼさで、無精ひげだらけで、疲れ切つていて、まるでうすぎたない浮浪者みたいだ。この人は、いつからこんなふうになつちまつたんだろうか。思い出せない。でも、こんなにくたびれて、よごれきつて、ちっぽけだ。顔立ちは似ているはずだが、もうよくわからない。ただ深緑の目の色ばかりが自分と同じだ。

父はゆっくり、しわがれた声で吐き出すように言った。「お前は最初、おれの希望だった」

エンゲルは、じつと聞いていた。

「十四年前だな、そうだな？ あのろくでもない女が逃げた。置き土産を残してな。おれは怒ったが、同時におれは考えたんだ、赤ん坊のお前を前にして、ひよっとしてお前の面倒を見ることで、真人間になれるかもしれないと思った。少しぐらいはやり直せるかもしれないと思っただ。だが駄目だった。どうだ、おれは何一つ変わらんな。お前はおれをまっとうな人間にしてはくれなかった。だがおれはお前を責めたりしない。だってお前は悪くないからな。だからお別れするだけだ。さようなら、おれのエンゲル。おれがお前をそんなふうと呼ぶのはこれが最後だ、いいな？」

「はい、お父さん」

エンゲルの返事をききとどけて、父は両手を離した。肩はふつと軽くなり、同時に、少年はなにかとても大切なものが失われたことを知った。

「お前がおれをそう呼ぶのも、最後だ」

父はもう振り返らなかった。擦り切れたコートの裾を揺らして、木枯らしの中を、うつむき加減に去っていった。うちへ帰って行ったのではなく、あの人はもう自分の知らないどこかへ去っていくのだということ、エンゲルは知っていた。あの人は去るのだ。だからもうどこへ行っても会えることはないのだし、あとはお互い、べつべつなものを食べ、べつべつなものを見ながら、最後の日まで、べつべつの生き方をするだけなのだ。これは永遠のお別れにちがいない。父の背中を、踊る枯葉が何枚も追いかけていった。

こげ茶色のうしろ姿が見えなくなったところ、門が開く音がした。エンゲルが振り向くと、森にかこまれた古城のような聖エルンストのポーチの奥から、上品なスーツ姿の紳士が歩いてくるところだった。ああ、この人がそうなのだ、とエンゲルはおもった。父に棄てられたかわいそうな僕をひきとつてくださる慈悲深い校長先生とやらが、この人なのだ。

彼はエンゲルを見るや、鷹揚に両手を広げて歓迎の意を表した。

「エンゲル・ミュラー？」と尋ねる声は、その姿とおなじように上品で、とてもあたたかく、柔らかだった。

「一人かね？」

彼は少し不思議そうに、エンゲルを見た。

「はい」

エンゲルは、ただ一言、そう返事をした。

第一話

【1】

新緑に木漏れ陽が散っていた。さながら白亜の古城のような聖工ルンストの外壁に、それは美しく降りそそいだ。

エンゲルが何気なく「まるで光のシャワーだ」というと、「もう五月だもの」と、隣を歩いているオリバー・デーニッツが気さくな様子でほえんだ。それから肩をすくめて、こう付け足した。

「素晴らしいね。君が言うと、なんでも詩的に聞こえちゃうんだな」「よしてくれよ」

「どうしてかね。僕が同じこと言ったって、君のようにはならないだろうな。やっぱり見てくれというものはその人の評価に大きく影響するもんだと思うかい、エンゲル？」

「僕をからかっているなら、きかないぞ」

僕はこれでも女みたいな顔だつてことを気にしてるんだぜ、とエンゲルが片方の眉を上げてみせると、オリバーは面白がるように、へえと目を丸くした。愛嬌のある顔がことさらひょうきんになった。「それじゃ僕と取り替えようぜ、その顔さ！ そしたら毎週外出許可をもらってさ、街でガール・ハントとしゃれ込むんだ。きつとなびかない子はいないぜ、よつぽど好みが偏つてなけりゃね」

エンゲルはあきれ声を出した。「僕の顔がなんだつて？」

「そりゃあ、きみは滅多に外出しないものな。いいかいエンゲル、世間つてのはこの監獄みたいな聖工ルンストを出たところにあるんだぜ。世の中には女の子つてものがいてさ、君みたいな顔をした奴のことがたいてい好きで、そのうえ何から何まで不思議だらけの生き物なんだ。まるで砂糖菓子そっくりさ。うっかり食べ過ぎると虫歯にかかっちゃうところまでね。でもたまらなくいいもんだよ。知

っている？」

「興味ないね」

オリバーは頭をかかえておおげさに叫んだ。「神よ！」

「きみつてやつは、辞書で引いたみたいな優等生なんだからな。いったい何が楽しくて、この二度とない青春を生きてるんだ？」

そう言いながらオリバーの白い手が後ろからのびてきて、エンゲルの首にまきついた。彼はこの年頃の少年の多くがそうであるように、親密な相手にはすぐ手をのばして触れたがるたちだった。自分と同じように骨っぽいからだをした同級生が触れてくるくすぐったさに、エンゲルは笑って身をよじった。「離せよ、ばか！」

「みんな君のこと噂してるんだぜ、東館の堅物つてね。ここに来てもう半年にもなるのに、罰則のひとつもくらったことがないなんて奇跡だよ」

「学校つてのは自律の精神を教えてくれる場所だと思っただけだね。」

そうじゃない、先月は二度も罰則をくらって、今週末の外出許可が取り消しになったオリバー・デーニッツ？」

エンゲルがやり返した。オリバーはとたんに顔をひきつらせて、のどがつかえたような声を出した。「ひどいや」

「どうだか」

「僕を憐れんでくれよ、エンゲル！ だからきみにこうして僕らの頼れる舎監生であるエンゲル・ミユラーに、真正面からお願ひしてるってわけじゃないか。君ときたら、ワイロのひとつも受け取ってくれやしなないんだから」

オリバーが手を緩める。その隙に、エンゲルは体を反転して自由になる。

ちょうど向き合うかたちになって、乱れた髪と首元のタイを直しながら、彼はわざと首をかしげて、何のことかわからないというふりをした。オリバーは雨の日に棄てられた仔犬だつてもうちよつとましな目をするだろうというほど情けない顔をして、ばつ悪そうに手を後ろにやってもごもごと口元を迷わせた。「きみの言うことな

ら、先生も無視しやしないだろ」

「さてね」

エンゲルはあくまでもそらっとぼける。オリバーはたまらずに泣きついてきた。

「頼むよエンゲル、先生にかけあってくれ！ 今週末はどうしても約束があるんだ、ベルタって可愛い子でさ、うまくいきそうなんだ。この僕が！」

「珍しく？」

エンゲルは皮肉のつもりで口にしたのだが、オリバーは大いにうなずいた。

「そうさ、彼女、僕に好意を持ってるんだ。こんな奇跡、二度はないうって断言できるね。今週末に会えるかどうか勝負なんだよ」

「愛には障害も必要だってね。クラウディオ・デュフナーが言ってたよ」

ひょうきんな顔を忙しく回転させて、オリバーは悲鳴じみた声をあげた。

「あんな嘘つき野郎と僕をいっしょにするのか？ あいつはもてるから、言い寄ってくる女の子をかわすためにそんなこ言っのさ。僕は違うよ、だって」

しばらく熱弁につきあってやった後、聖エルンスト高等中学始まって以来の優等生は、この悪友のためだけに折れた。「考えとく」それを聞くやオリバーは、文字通りとび上がって喜んだ。頼んでもいないのに、エンゲルの手から教科書一式と筆記用具をひったくって走り出し、「恩に着る！」と叫んだ。「これは僕に持たせてくれ！ ほかに重たいものはないか？ 今日は天気がいいようだけど暑いなんてことは？ その上着はどうするの？」

彼は、エンゲル・ミユラーから「考えとく」の一言を引き出すことに成功したときは、ほとんどの場合においてよい結果がもたらされることを知っているのだった。何かにつけこの調子だから、彼はどこに行ってお調子者と呼ばれる。だが、その言葉には一片の親し

みと愛情とがある。彼を心から嫌いになれるものは、この広い校舎のなかにはいないにちがひなかった。いつだって彼のほがらかさと魅力的なブラウンの目は、そのとき相對する誰かの心の中に、いつも簡単に入り込むことができた。彼が口にするちよつとした冗談は、それを聞いた誰もかれもの眉をほんのちよつぴりだけ下げの役に立った。そんなデーニッツの憎めないところを、結局のところエンゲルもまた嫌いになれず、それだからこうして隣り合つて歩くことがしばしばあるというわけだった。彼らはよい友人どうしだった。

それでもエンゲルは念を押しした。飛び跳ねながら前を行くオリバーの背中に向かつて、

「僕は考えとくつて言ったんだぜ。よく考えた結果、やっぱりこんなやり方は君のためにならないと思つて、先生に別のお願ひをすることもあるかもね」

「エンゲル、そんな！」

オリバーがひっくりかえつたような声をあげて立ち止まった。振り返つた顔が真っ青だ。

二人でしばし顔を見合わせ、やがて少年たちは、どちらからともなく笑いあつた。

*

オリバーを先に戻らせてしまうと、エンゲルはひとり中央棟にそいだ。この半年の間にすっかり慣れ親しんだ聖エルンストのなかには、もう目をつぶつても目的の場所にたどり着くことができた。廊下のじゆうたんの踏み心地、壁のてざわり、手すりの磨き込まれた艶までが、いまや彼のものだった。

途中、幾人もの生徒とすれ違つたが、みなエンゲルに親愛のこもつた挨拶を投げてきた。「やあ、ミユラー！」と気さくに呼びかけ

てくる者もあれば、意味深な眼を投げてくる者もいた。このあいだノートを貸してやった上級生は、「先日は助かったよ、今度お礼をさせてくれ!」といった肩をたたいてきた。彼は落ち着いた笑顔をつかべて、ひとりひとりに手をあげて応じた。そうすることが重要だった。そうして、悠々と廊下を歩きつづけた。

やがて一つの扉の前で彼は立止った。まるでこの部屋の住人を象徴するような、りっぱな獅子のレリーフの扉を二度ノックすると、なかから「どなたかね」と低い声がした。「エンゲル・ミュラーです、ヘル・エドゥアルド」

「お入り」

エドゥアルド教師は立派な机で書き物をしていた。思えばいつもそうだった。この先生が、たとえばソファでくつろいでいたり、うたた寝をしたり、靴下を脱いで背伸びしたりしているところを、誰も見たことがない。タイをほんの少しゆるめたところすら、誰も見たことがない。

教師の机は窓を背にしているのでひどい逆光だったが、エンゲルはまぶしさを顔に出さなかった。静かにエンゲルが入室すると、彼は少し顔を上げ、厳格な灰色の目でエンゲルを真正面にとらえた。彼のこの目ににらまれて、震え上がらない生徒はいなかった。むしろ、ただひとり、エンゲル・ミュラーを除いては。

「何か用かね、エンゲル・ミュラー? 先日のレポートなら、いま採点をしているところだよ。返却はもうしばらく待ちたまえ」

エンゲルは扉を後ろ手に閉めて、肩をすくめた。

「そのことじゃないんです」

「まあ待ちたまえ。これを済ませてしまおうから」

エドゥアルド教師は入り口のちかくの、来客用のソファを目で指した。エンゲルは言われたとおりにした。それから、何気なく室内を見回した。天井には琥珀色のシャンデリアが吊り下がっている。

本棚にはびっしりと蔵書がならんでいる。床のじゅうたんは少しくすんだブドウ色。とても品のいい色だと彼は思う。エドゥアルド教

師が向かっている机には、このあいだエンゲルが書いて提出したレポートが載っている。その隣には、白磁のカップがある。

「よければ、お茶をお淹れしましょうか。カップが空では？」

「できるかね？ これは」

「サモワールの使い方は知っています」

「ならお願いしよう」

エンゲルは立ち上がり、てきぱきと準備を始めた。サモワールに火を入れる。ひとそろいの道具を並べ、戸棚からジャムのびんを取り出し、スプーンの準備をする。しばらくすると部屋に紅茶の香りがただよいはじめた。すばらしい香りの茶葉だった。うんと高価にちがいない。こういったものに妥協をゆるさないのは、いかにもこの厳格な教師らしいとエンゲルは思った。ふと顔をあげると、エドワード教師はいつしか採点の手をとめて、じっとエンゲルの手元を見ていた。「どこで？」

「父が使っていました」

エンゲルは笑顔で返事をした。「僕の父は、若いころにたくさん旅をしたので、いろいろな国のお茶の作法を知っています。これは一年ほどロシアにいたときに習ったのだと言っていました。ジャムやハチミツを好きなだけ食べてもいいんだって……ときどき子供みたいなことを言うんです」

「いい手順だ。お父さんに習ったのかね」

「はい」

「続けたまえ」

エンゲルは手元の作業にもどった。

香りののぼるカップを盆にのせてそばに行くと、エドワード教師は「ありがとう」と言ってお受け取った。「ジャムはどうなさいます？」

エドワード教師はジャムを所望した。エンゲルは多くも少なくもなく、ちょうどいいひとさじ分を掬って差し出した。教師はついに、「それで、今日は何の用かね」と口にした。「個人的な用件か

ね？」

「お話をさせていただきたくて」

と、エンゲルははにかんだような笑顔を作って切り出した。

「その……先生は、若い男女の　とりわけ僕らのような年齢の子供たちの異性交遊について、どう思われますか？」

エドワード教師はめずらしく、片眉を上げた。少しばかり怪訝な顔をしたように見えたが、すぐにいつもの厳格な表情にもどり、よどみなく答えた。「健全な男女の交流が、必ずしも青少年に悪影響があるものとは思わんよ。もっとも、われわれの時代にはそう考えられているようなふしもあつたがね。だが五十年前の考え方が今の世に通用するとは思わん。大いにやりたまえ」

エンゲルは胸に手をあてて、いくらかおおげさな様子で「よかったです！」といった。

「問題は、恋の魔力が強すぎるってことなんです」

「とどうと？」

「僕らのような未熟な青少年には、とても抗えるようなもんじゃない。女の子のほほえみや、白い手や、髪の毛の香りは、たちまち僕らを虜にしてしまうんですもの。頭の中は彼女のことですばい、もし振られたらどうしよう？　勉強に身が入らないなんてことに、覚えは？」

「誰の話をしているのかね。どうも君ではなさそうだが、エンゲル・ミユラー」

「いま、まさに花をつけようとしている恋の若芽があるとして」

「まわりくどい表現はよしたまえ。誰のことだね」

「オリバー・デーニッツです」

エドワード教師は嘆息した。「そういったことにはばかりずいぶん勉強熱心なようだね、彼は」

「まさに花をつけるか枯れてしまうかの瀬戸際に置かれた哀れなはずらんです。もし今週の待ち合わせに行けなかったら、相手の子は二度とオリバーに会おうとは思わないでしょう。彼は告白をするち

ヤンスさえ永遠に失ってしまうんです、先生！ もし　どうか、彼の外出取り消しを撤回してください。さっさと、レポート十枚でも彼はよろこんでやると思うんですけど、どう思われますか？」

「本気かね？」

「僕だつて友人の恋を実らせたいと思うことくらいはあります」「エングルはほほえむ。「恋の誘惑を知る青少年のひとりとして」

しばらく経つて、教師は長いため息をついた。

「今回はこのお茶に免じよう」

「ありがとうございます、先生」

「ただしオリバー・デーニッツ、彼はいかん。未熟な青少年であることを理由にするには、いささか羽目はずしすぎるところがある。これは寮長である君も認めざるをえないと思うが、そうだな？」

エングルははいと言つてうなずいた。

「レポートの出来によつては、二度と私の慈悲を期待できないと思いたまえ。そう伝えなさい。さがつてよろしい」

エングルは折り目正しく一礼して、彼の前を辞した。

部屋を横切り、扉に手をかけたところで、後ろからエドゥアルド教師の声が追いかけてきた。「美味しいお茶をありがとうございます。お父さんは、よほどきちんとした教えを君に授けたのだな」

「ありがとうございます」

「家族を大切にしまえ。お茶の習慣を愛するすべての人は、必ず深く理解しあえる」

「父も同じことを僕に言います。家族は僕の誇りです」

「下がつてよろしい」

もう一度振り向いて礼をしたとき、エドゥアルド教師はすでに手元のレポートに目を戻していた。エングルは邪魔にならないよう、そつと扉を閉めた。そうしてから、そのままの姿勢で動きをとめた。獅子のレリーフの、空洞の眼が彼を見ていた。

家族は僕の誇りです。

彼がそうしていたのは一瞬のことだった。

突き放すようにドアから手を離すと、きびすを返し、規則正しい足音とともに廊下を歩き出した。このときオリバーのことはもう忘れていた。エドワード教師に言ったことも、言われたことも半分以上はどうでもよかった。それに彼は恋の誘惑なんて知らなかった。西日の射す廊下を歩きながら、彼はじっと自分の手のひらを見つめた。

ロシア式紅茶など淹れたのは今日が初めてだった。

第二話

【2】

部屋に戻ると、彼の机の上にはどこかの誰かさんが持っていたはずの筆箱と教科書が、いやでも目に付くように、きれいに端をそろえて置いてあった。小さな子供が、ママに褒めてもらうために何か他愛のないことをやりとげて、その結果をよく見えるところに見せびらかしておくときの、あの感じだった。エンゲルはそれらを目の端で見やり、首もとのタイをゆるめた。

その誰かさんかというと予習もせず、自分のベッドの上にあぐらをかいて、顔面いっぱいここにこにこ笑顔をはりつけているところだった。

「何さ？」

わざとそっけなくエンゲルが聞くと、オリバーは真っ白い歯をのぞかせて、声をひそめて「うまくいったんだろ？」といってきた。こんなときのオリバーは、まるでとっておきのいたずら話をするように活き活きとしている。

「それでなきや、きみが戻ってくるはずがないもの」

「僕を買いかぶりすぎてるんじゃないの」

「プライドの問題さ」

オリバーはベッドにごろりと寝そべり、うきうきとした声を出した。「それで？」

「二十枚」

とたん、後ろでオリバーのかたまる気配がする。ぬけている彼も、さすがにこのときはばかりは理解が早かった。なんのことが、すぐにわかったようだ。

かまわずに背を向けたまま、机のうえを片付けながら、エンゲル

はつづけた。「レポートを二十枚。それが交換条件だとき。いいじゃないか、今週末の外出はできることになったんだから」

ふりむいて、付け足す。「まあ、外出できれば、だけど」

「エンゲル！ きみ」

「あのねえ、オリバー」

彼は指をつきつけた。「きみ、よそでパンを買うとき、お金を払わなかったことがあるの？ 僕や先生がとくべつ意地悪なわけじゃない。なんだって、ただってことはないんだよ。世の中はとりかえっことでできてるんだ。それだけの話さ。わかる？」

「でも、それじゃあ、僕の今週の予定がレポート書きで埋まっちゃうじゃないか？」

「君しただいよ」

エンゲルは肩をすくめる。「一日五枚も書けば、すぐだよ。今日はまだ火曜日だもの、じゅうぶん間に合うじゃない」

友人はあんぐりと口をあけて、たっぷり十秒間、かたまつた。その間にエンゲルは上着を脱いで、ハンガーに掛け、ブラシをかけていつものところにきちんともどした。そのすぐ近くにオリバーの上着が脱ぎ捨てられてあるようだったが、それは無視することにした。それから引き出しをあけ、いつもの鍵とマツチがそこにあることを確かめた。消灯のあと見回りに行くときにつかうのだ。何も問題がないことをみとめ、鍵だけをとりだして、エンゲルは引き出しを静かにしめた。

そこまで済ませたころ、ようやくわれにかえったオリバーが上目遣いにおずおずとした調子でたずねてくる。「その もちろん、ここで見捨てやしないよね？」

エンゲルはなんとなく手の中の鍵を放り投げたり受け止めたりしながら、「今なら取り消しがきくかもよ。どっちがいいか、よく考えたら」とだけ答えてやった。

それを聞かされるやオリバーは、ベッドにあぐらをかいたまま、ばか正直に悩みはじめた。この取引をなかったことにしてもらおうか

(もつとも、それは教師の性格からしても得策とは思えなかったが) レポートを週末までに仕上げるかを本気ではかりにかけているらしかつた。彼のこういったところがエンゲルは嫌いではないが、ばかみtainな課題を手伝って週末をつぶしてやるほど好きでもないというところだった。

見切りをつけて、彼は声の調子をかえた。

「それじゃ僕は食堂に行くけど、きみはいつまでそうしてるの」

「もう？ だって」

彼はきよんととして、壁かけ時計に目をやった。「まだ五時半だよ。おなががすいたのか、エンゲル？」

「これだものな、きみてやつは。このうえ当番をさぼったりしたら、もうレポートを百枚書いて提出したって許してなんかもらえないと思うけどね」

「ああ、そうだ、僕！」

オリバーは叫び、文字通りベッドの上でとびあがり、それから転がるようにとび降りた。まったく彼の動きときたら、いちいちこっけいなことこの上なかった。

「僕はもう、君への貸しをいちいち数えるのをやめたぞ、オリバー」
エンゲルはふりむいて、にっこりした。

それからドアに向かい、早く来ないと置いていくぞ、そればかりか外から鍵をかけちまうぞというふうに、指にひっかけた鍵をくるくるくると回してみせた。彼の指の白くて長いことは、一部の生徒のあいだで有名だった。

後ろからオリバーがあわてて追いかけてくる気配がした。エンゲルはそれを待たずにドアを押し開けて、つま先だけで固定した。

「そう、言い忘れてたけど、オリバー。先生から伝言だ」

哀れなオリバーは、こけつまろびつ上着を着なおしているところで、「へ？」と間の抜けたような声をあげた。エンゲルはつづけた。「レポートの出来によっちゃ、二度と外出は出来ないと思え、だそっだよ」

オリバー・デーニッツは、ぼかんとしたあと、上着が裏返しなのにも気づかないで、
「あんまりだ！」と叫んだ。

*

時計の針が十時をさすころ、エンゲルは予習をやめた。

彼がそつと椅子を立つと、すでにベッドに寝転んであたためたミルクをちびちび飲んでいたオリバーは顔を上げ、「時間かい」といった。エンゲルは黙ってうなずいた。

机の横に準備しておいたランプをとりあげ、引き出しからマッチを出して、灯を入れた。もう何度も何度もくりかえしていることなので、呼吸をするのと同じように、彼の手は勝手にうごくのだった。「きみ、僕が戻るまで起きてる？」

「わからない」

「いいさ。僕の机の灯りはこのままにしておいて」

エンゲルは上着を着込んだ。初夏の夜はもうそれほどさむくはなけれど、彼がこの部屋から外に出るときにきちんとした格好をしなかつたことはいちどもなかつた。彼は巡回に行くとき、必ずタイと上着とをきちんと身に着けた。

「しかし生真面目だね、君は」

「君ほどじゃないさ」

オリバーのねむたい目に見送られて、エンゲルは廊下に出た。静かだった。

異常は、東館の三階の廊下でみつかった。

ちょうど階段の陰になるところだった。手にランプをもって、青白い夜のなかを巡回していたエンゲルは、そのことに気がついて注

意深く足を進めた。前方に人影があった。それは夜の闇に、うごめくように盛り上がっていた。ひとつではない。ふたつだ。寄り添うように、かたまるように、影がある。

ごく近くまで近づいてから、わざと足音をたてた。人影のひとつが飛び上がり、もうひとつも少し遅れてとびあがった。エンゲルは黙って近づいていった。窓からは月光もささず、エンゲルの持つ古いランプの、琥珀色の灯りだけが、そこにあるものを浮かび上がらせていた。

「もう消灯時間だよ」

エンゲルはしずかに声をかけた。腕をのばして前にランプを掲げると、そこにいる二人が誰だか知れた。ひとりは同級生のディータ・ロベルト、もうひとりは一学年下のエンゲルは一瞬考えて、彼の名前がミハイル・シューベルトだということ思い出した。

なににせよディータ・ロベルトとはやっかいだ！ エンゲルは顔に出さないままそう思った。彼はあまり相手のしやすい生徒ではなかったからだ。

ふたりは、まるで抱き合っているように、ぴたりとくっついていった。そしてそのまま、エンゲルのほうに向き直った。家人にみつかったどろぼうのように、ふたりとも青ざめていた。

「消灯は十時だ。部屋に戻りたまえ」

事務的な口調でそういうと、二人はなぜか少し安堵したようだった。愛想笑いのようなものをうかべ、それからひどくよそよそしい様子で立ち上がり、何か口の中でぶつぶつ言いながら、エンゲルの横を二人とも足早にすりぬけた。悪かったね、ちよつと話に熱がさしてね、云々。ディータは右、ミハイルは左、まるで川の流れが石をよけて流れるようにそそくさと、通りいっぺん謝って、そのまま立ち去ろうとした。

彼らが川の流れのようになかったのは、ちよつとすれ違ふ一瞬に、エンゲルの両手が二人を強くおしとどめたからである。

彼は左手にランプを持っていたので、ミハイルのことは腕全体で

抱きとめるようになつた。ミハイルは学年でも飛びぬけて小柄で、華奢な生徒なので、背の高いエンゲルにはどうということもない芸当だった。ただ彼にランプがあたつてはいけないので、そこだけは一瞬気をつけた。

いっぽうのデーターは背高で体格もいいので、通り抜けざまに腕をつかんだ。彼は後ろに転びかけ、日ごろ体育の授業で鍛えた足の強さがなかったら、あやうく倒れこむところだった。

エンゲルはそのまま、静かに告げた。

「ただし、今していたことを白状してから」

二人がぴしりと凍りついた。エンゲルは横目で二人を順繰りに見やり、「たばこを吸っていたね。ごまかしてもだめだ。今持っている分を、出して」ときびしい口調で命令した。

しばし息苦しいような沈黙があり、先に折れたのはミハイルだった。彼はおそおそと、ポケットから出したたばこをエンゲルに差し出した。そして、「正直に言つたよ、先生には黙つてくれる？」と、哀れっぱい声を出した。

エンゲルは返事の代わりにデーターを見やった。すると彼は気丈にも、この天下御免の優等生をにらみ返してきたが、エンゲルがもうひと睨みすると、観念したのかポケットの中に手を突っ込んだ。彼の大きな手はいかにも無造作にミハイルの倍のたばこをつかみ出した。どうやらこの小柄で気弱な同級生をちよつとした悪事の誘惑で釣つたのは、データーのほうであるらしかった。

彼はとつくに声変わりを終えた、特徴的な低い声で、ぼそりといった。

「先生に言うのか」

「今日がはじめてかい？」

ミハイルがちぎれそうなほど首を縦に振る。天使みたいなくなるる巻き毛が、そのたびに揺れる。「データーは？」

「どうせ君は、俺の言うことなんて信じないだろうがね、エンゲル・ミューラー」

エンゲルは肩をすくめた。これはあきれた強情っぱりだ。

デュータ・ロベルトは、エンゲルが転入してきた時からずっと彼にある種の敵意を向けてきていた。その理由はエンゲルには分からなかったが、どこにだって優等生をやっかむ者はいるものだから、さして気に留めていなかった。だがこの期に及んで往生際の悪いこの生徒に、少しあきれれる気持ちかわいてきた。「きみがどうして僕をそんなふうにするのか知らないけど、信じるかどうかはまず話を聞いてからだ」

デュータはランプの灯りからにきび面をそむけ、しぶしぶと、「むしゃくしゃしてんだ」といった。

「なぜ？」

「君のせいだ」

返事は端的で、明確だった。

「理由にならない」

「なるさ。君が転校してきたからだ」

「成績の話かい？」

「成績も、全部だ」

デュータのぶつ切りのような話し方は、少しずつ厳しくなった。

感情を押し殺したような低い声から、だんだんとたがが外れ始めた。「君なんか来なけりやよかったんだ。君のせいで俺が一番じゃなくなった。君のせいで友人からの信頼も失った」

「僕が君からそんなもの奪ったって言いたいのか？」

エンゲルの声が軽く調子上がりになった。「僕は、一度だって君から友達をとってやるうなんて思ったことはないよ」

「君がなくても、結果としてそうなのだ。みんな俺よりも君のほうを好きになった。わからないところがありや君に訊くようになった。君が転校してきたのが悪い」

ミハイルが心配そうに二人の顔を見比べていた。彼はここでこの舎監生におかしなことを言って、へそを曲げられやしないかとおびえているようだった。

「……とにかく、たばこはこれで全部なの、データー」

エンゲルは大きいため息をついて、肩を上下させた。なんだかひどく疲れたような気分だった。データーはだまってうなずく。ミハイルはまたしても、何度も何度もうなずく。

「データー。君は僕がここに来たころから　半年前から吸っていると思っ方がいいのかい」

データーは返事をしない。エンゲルがもう一度、今度は声に威嚇をにじませて「データー」というと、彼はうなるような声で、「三月ほどだ」と答えた。「君が俺の目に付くようになってから」

「わかった」

エンゲルは二人の手からたばこを取り上げ、手の中でにぎりつぶした。

「今度だけは目をつぶる。ただし君に同情したのじゃないから、そのつもりで」

とたん、データーの声が爆発した。

「ミューラー！」

エンゲルはびっくりしてデーターの顔を見た。

「先生にちくればいいじゃないか！　ええ、優等生さま！　それでご立派な態度を見せたつもりかい！」

見逃されたのがよほど気に入らなかつたのか、爆発するように声を荒げるデーターに、ミハイルが必死でとりついた。「静かに！

データー、どなったりしないで、みんなが起きる！」彼の華奢な腕がまきついて、データーの胸回りはそれよりも太かった。

「俺は君のようなやつが一番嫌いなんだ、家族に恵まれて、成績だつて、なんだつて優れているのに、自分ではまるきりそんなことに気がついてないようなおすまし顔をしてやがる！　なあミューラー、俺の父と母が今どこでどうしてるか教えてやるうか？　あの世

さ！　夜通し喧嘩したあげく、二人仲良く、俺を置いて逝っちまった！　俺は奨学金をとってここに来てるんだ！　もし一番じゃなくなったりしたら　成績が下がったりしたら　どうなると思う、

エンゲル・ミユラー？ お前が俺から一番を奪ったりしなけりや、俺はたばこで憂さを晴らすことなんて覚えていなかったらうさ」

エンゲルはだまって背を向け、歩き出した。
うしろから声が追いかけてくる。

「お前はなんでも持っているのに、ひとつだつて俺にゆずってくれやしないんだな！」

「データー！ やめてよ、せつかく見逃してくれっていうのに、君がそんなふうにならわいだら僕までとばかりをくうじゃないか！」
ミハイルの泣きそうな声が出た。ふりはらわれて、彼がしりもちをついた音も聞こえた。エンゲルは手の中のとばこをにぎりしめた。もしそれができるなら、今すぐ振り向いて、こんなもの、ずいぶんと馬鹿馬鹿しいじゃないか、と笑ってやりたい思いもした。

こんなもので　こんな数ペニヒの代物で、僕はここにいる無数の生徒の弱みを握ることができるのだ。僕の気持ちひとつで、見逃してやることもできるのだ。感謝されようなどと思っちゃいけない、これは僕の気まぐれなのだから。言つたらう、同情なんかしやしない。なあデーター、わかるかい？　きみはそれがさぞ気に入らないのだから、知つたことか！

気づけば、もうデーターのわめき声は聞こえていなかった。ミハイルが引つ張つていったのかもしれないし、あるいはミハイルを置いていつちまったのかもしれない。どうでもいいさ、とエンゲルは思つた。

このつまらない紙巻きがもたらしてくれりいつときの安息は、どんなだい、データー。少しは気が晴れるかい。醒めた後の気分はどれほどみじめなことだらうね、データー？

僕なら君よりもうまくやっているさ、見つかつたりせず、なあ、データー！

部屋にもどると、オリバーはもうすやすやと寝息を立てていた。

レポートの件がどちらに転んだか知らないが、すくなくとも今こうして寝ているということは、実に彼らしいことではあった。

エンゲルは鍵とランプを元の場所にもどし、別の引き出しを開けた。そして一瞬のためらいの後、そこから小瓶をとりだした。月明かりもない部屋の中、それはかろうじて琥珀色をしていた。

コニヤックを自分の机に隠してあることは、今のところ誰にも見つかつたことがない。彼が時々こっそりそれを取り出してのむことは、同室のオリバーも気づいていない。

彼は目をつぶって、瓶に口をつけた。強いアルコールをひといきに流し込んだ喉が、かっとなくなるのを、ここちよいとはこれっぽちも思わなかつた。

アルコールの力を借りてねむることを覚えたのは少し前のことだ。美味いと思つたことは一度もなかつた。自分がそうしなければならぬという自覚もないままだつた。ただときどき、こうしなければならぬような時がある、というだけのことだ。

データーはたばこが旨いのかな、と少し考えて、エンゲルはその夢想をとりやめた。

第三話

【3】

オリバー・デーニッツが『監獄みたいな』とふざけて評したこの聖エルンストが、エンゲル・ミュラーにとっては樂園にかぎりなく近い場所であったという事実を、まず今のうちに述べておかねばならない。なぜなら彼はまさに『監獄みたいな』生活をせねばならないところを知っていたからである。そして彼はもともとそこにいたからである。

ハーゲンの寒い片田舎でそれは始まった。空腹と、得体のしれぬおそろしさと、薄暗い灯りがすべてだった。監獄だった。そこは精神の監獄だった！彼は自分を取り巻く冷たい檻を生まれてすぐに知った。それは目に見えなかったが、確かにそこにあり、強固で容易に打ち破れぬものだった。だから凍り付いているほかなかった。七つのころに望まぬことをおぼえ、十になるころには希望はおそろしいものだということを学んだ。

父はいつも酒を飲んでいて、飲んだくれては彼を打ち、なじり、わめくのだった。それからときどき泣く人だった。擦り切れかかった芯のわずかな灯りに背を向け、両手で顔を覆って、おいおいと父は泣いていた。そんなとき彼はそれが終わるまでじっとしていた。ひとしきり泣いた父はまた酒を飲み、酒を飲んでまた泣いた。父についておぼえているのはそれくらいのことだ。別れの日にくれた幾らかの小銭があの人のもてる慈悲のすべてだったというなら、もはや縁などというものはそれっぽっちの価値しかないのだ。父と息子などという言葉それだけに、どれほどの重みがあるものか。それが証拠に、親子の縁などというものはこのとおり、いともたやすく切れてしまったではないか！ 思い出すことなどほとんどありはし

ない。もう忘れたのだ。あの人はときどき酒瓶の代わりに木炭を手
にしていた。だがそんなものはもう昔のことだ！

そこから連れ出されたあとで、彼になにが起こったか？ 生徒名
簿に名前が登録されてすぐ、立派な仕立てのよい制服と、シャツと
タイとが与えられた。靴も与えられた。二人共同ではあるが部屋を
与えられ、専用の机とベッドが与えられた。食事は決まった時間
にとることができた。それらはエンゲルが自分で何ひとつはたらき
けなくとも、生徒であることが決まったというだけで与えてもら
うことが出来た。校長は聖人のごとき寛容さをもってエンゲルを迎
え入れた。

この聖エルンストの前に置き去りにされたあの日、彼はなにを思
い浮かべたか？ 彼は、自分の行き先を予想したのである。それは、
このような制服に身を包んで、まっとうな生徒として過ごす日々な
どではありえなかった。この門の内側には決して入ることなく、そ
れは許されず、代わりにどこか別のところに行かねばならないのだ
ろうという漠然とした予想にほかならなかった。立派な門の前にひ
とり残されたとき、彼は思ったのだ、この内側にいる誰か、その途
方もない権利者たる彼らが自分に声をかけるなどということがどう
して起ころう？ 父の背中が遠ざかるのに、枯葉が父を追いかけて
ゆくのに、自分ばかりがこんな立派な門構えのギムナジウムの生徒
になるなんてことが、どうして起ころうか。

今すぐに立ち去らねばならないと感じた。彼はすぐにでも動き出
さねばならなかった。だがほんとうを言えば、少しぐらいは立ち止
まっていたかった。彼は（彼らは）昨晩からほとんど休んでおら
ず、ここへ来るにも歩きづめだったからだ。へとへとだった。鉄道
はそう長く乗れなかった。彼らは二人で手を繋いで、長い道をひた
すら歩いてここまで来たのだ。どちらから繋いだのだからはよくわか
らなかったが、父のかさかさした手が触れたとき、無性に悲しかっ
たことはおぼえていた。ともあれ彼はここで少し休みたかった。だ
が、それが済んだら。つまり、この突如もたらされた環境の変化

について必要なことどもを飲み込み、必要最低限のあきらめをつけたら、まずはどこかへ行つて今日寝る場所を探さなければならぬのだろうという、ぼんやりとした、絶望に満ちた予感も同時にあった。それは疑いもなかった。自分は、要は捨てられたのだから。

校長に話をしておいたという父の言い分を、どうして信じられたものか。お前は今日からこの生徒になるのだという話を、どう飲み込めたものか。だって僕は捨てられたのだから！

ところがそれらの絶望的な予想は、ご存知のように、門の内側からあゆみよつてきた一人の紳士によつて、あっさり、すべてひっくり返されたのだつた。ロツテ・フランク校長は何もかも現実であることをエンゲルに示した。そしてその日から、彼はほんとうにこの生徒になつたのである。

ここでは、ねむる場所の心配も、食べるものの心配も、なぐられることへの恐怖も、孤独も、寂しさも、未来をあきらめることへの悲しみも、何も感じる必要がなかった。ただ守られていればよかった。そのかわりにやらなければならないことは、ごく少なかった。求められることの倍以上のものを与えられた。なんという楽園であることが。

それから彼は解放され、開放された。忌まわしかったエンゲル・ミユラーという名前さえも、その中身を変化した。隙間風のすさび暗い家で、ただ縮こまるように、地面のなかの種のように、耐え忍びながら父親と暮らしてきた十四年間で与えられなかったものすべてがここにあった。

エンゲルは幸福を知つた。安寧と、安らぎとを知つた。星と月と闇に包まれてぐっすりねむる夜のすばらしいことを知り、朝日とともに目を覚まして、きょうはどんな一日になるだろうかと考えることのほがらかさを知つた。やせ細っていた体は日に日に健康を取り戻し、髪と肌につやが戻つた。

それから彼は、生まれて初めて友人というものを知つた。彼らと話し合い、ふざけあい、同じものを読み、食べ、同じ空の下で生活

をし、日常のなかの些細なことどもに感想を言い合うことの楽しさを知った。はじめのうちにはなにげない会話にさえ胸が躍った。それを気づかれぬように、わざと無表情を装ったりした。こんなにも楽しいことがこの世にあったなんて、自分はそれを知らずに長いこと生きてきただなんて！

彼は開かれた。エンゲル・ミュラーは、いわばここに来て、生まれて初めて『生まれた』のだった。彼の人生はここからはじまり、これ以降、すべて彼に帰属するよきものは、この聖エルンストのおだやかで美しい日々によってはぐくまれた。

成績がよいのはあたりまえだった。彼はよく勉強をしたからである。彼はこの新しい生活に慣れるにしたがって、過去を捨てることを考え始め、やがてそれを決意した。それはすなわち、彼が自分から能動的な希望を持ったことを意味した。

生まれたときから勝手に着せられ、ほかに代わりにするものがないから仕方なく着続けていたばるきれのような過去を脱ぎ去り、未来ある、めぐまれた十四歳の少年エンゲル・ミュラーとしてやり直すために、彼はまず優等生になることからはじめたのである。こういった目的を持つ人間は、かならずそれをやりとげる。彼らは一種ふしぎなはたらきによって、ふつうの人間以上の力を発揮するものだからである。

さもありなん、エンゲル・ミュラーは優等生にならねばならなかった。それも完璧な優等生にならねばならなかった。それによって自分をだますことが、いちばん最初にやらなければならないことだったからである。彼は自分を錯覚させた。未来を引き寄せ、過去を意志の力で作り変えた。僕は優等生だ。生まれながらの勝利者だ。家族に恵まれ、愛されて育ち、頭脳明晰で、幸福のなかに生きている優等生なのだ。

彼はそのための努力を何ひとつ惜しまなかった。その結果はやがてあらわれた。エンゲル・ミュラーはたちまち誰からも好かれる人気者となり、先生からは信頼され、友人たちから愛されて、春には

名誉ある舎監の役目をあたえられた。

美しいブロンドや顔立ちは、いつしか崇敬の対象になった。もつとも、男子校では時としてこういった性質を持つ少年があらわれ、好奇心の的になることがある。彼のこのような点は、半年前にはじめて彼が姿を見せたときから生徒たちの度肝を抜き、その後もずっと水面下で噂され続けていたものだった。なにしろ彼は、エンゲル・ミュラーは、美しかったのだ。これは何度でも今のうちに繰り返しておかねばならない。彼は美しかった。

彼は下級生たちがこぞつてエンゲルにあこがれているのを知っている。同級生のなかにも、エンゲルを特別な目で見たり、彼を女みたいだという者があるのを知っている。大いに結構。それが彼の結論だった。エンゲルが作り上げようとした『エンゲル・ミュラー』にとつて、それはひじょうに有用だったからだ。

つくり話などは、何の苦労もなかった。父親と暮らしていたときに、何度も夢見てはむなく打ち消した、理想の家族の姿をそのまま重ねればよかった。何ひとつ難しいことはなかった。ことばはこのとき、超越的なはたらきを彼と彼をとりまくすべてのものにもたらした。うそはもはやうそでなくなり、真実こそが虚構にとつてかわった。彼はそうして、過去を徐々に追い払い、やがてすべて放棄した。それはエンゲル・ミュラー少年の勝利の瞬間にほかならなかった。

彼は過去を駆逐したあと、現実をもぬりかえた。自分の半生をみずからの手で創造したことは、優等生になることと同じぐらい、あるいはそれ以上に慎重に、エンゲルがやりとげたことのひとつだった。

たとえば、家族である。世界中の旅の思い出や、ロシア式の紅茶の淹れ方を教えてくれた父と、美しく思慮深くやさしい母と、おませだが愛らしい妹と、それから犬が、彼の家族だった。彼らはエンゲルにほほえみかけ、話しかけ、そこに実在するかのように彼を包み込む。否、彼らは実在した。もはやエンゲルにとつては、彼らこ

そが実の家族に他ならなかった。

半年前に、枯葉に追われるようにして去って行った男のことなど、彼はもうおぼえていない。おぼえているはずはない。夜眠る前に、エンゲルはそつとそのことを、自分自身に言い聞かせる。今頃はきつとイギリスにいるに違いない父に、おやすみなさい、とよびかける。

*

真夜中の出来事から数日ほど過ぎていた。六月の半ばごろだったかもしれない。何日、というよりも、何日でもいいような、ごく適当に選びだされたにようなある一日だった。どこにでも転がっている一日だ。雨だったので、空がにごっていた。後ろのほうで誰かがおひるまでにやむかなあと言い、もうひとりがそれに答えて何か言った。エンゲルはどちらも聞いていたが、同じように空を見上げながら、さてどうだろうと自分でははかりかねていた。何しろ空がにごっていた。

礼拝堂から講堂へ向かうには、渡り廊下は一本しかないのので、雨の日はこんなふうにゲルマンの大移動をやるはめになることがままあった。朝はみな授業が始まるまで決まったように動くので、なおさらだった。だから話し声が勝手に聞こえてきたりする。となりの友人に向けて話したことが、後ろのほうから返事が返ってきたりする。

ふりむけば、生徒をみんなぞろぞろと吐き出してしまった礼拝堂が、いつもどこかせいせいして見えるのがエンゲルには少しおかしかった。

彼がちらりと首をめぐらせようとすると、すごい勢いで後ろからやってきた何かが首にまきついた。それはもちろん誰かの腕だった

が、誰の腕かは考えるまでもなかった。すぐに耳元で声がした。「このあいだ、何かあったのかい？」

「何が？」

オリバー・デーニツツはエンゲルをふりむかせないようにしながら、自分だけ目線を後ろに向けて、「何がって……まさか気づいてないなんて言わないだろうね？ 僕見てたよ、礼拝のあいだじゅう、恐ろしい目で君のことにらんでいたんだから。データー・ロベルトがさ」

エンゲルはひつつかれたまま肩をすくめた。「いつものことだよ」

「そりゃあそうだけど、いつもよりひどいようじゃないか」

「あいつ、僕のこと嫌いなんだとき。みんな知ってるよ」

「何かあったってわけじゃないのかい？」

「僕は大丈夫。心配いらない」

「君はいつもそれだなあ」

オリバーが首にまきつけていた腕をほどく。その反動で、ちよつとばかり足元がよろける。彼はエンゲルよりも頭一つ分背が低いので、だいぶ背伸びしていたようだった。エンゲルは彼の腕をもってやった。

「データーのこと、嫌いかい？」

ややあつて、声をひそめてオリバーが訊いてきた。エンゲルは腕をはなし、沈黙でもって聞き返した。べつに肯定したつもりも、否定したつもりもないただの沈黙だった。

友人は首の後ろあたりを適当にかきながら、言いづらそうに口もとを迷わせて、「君が来る前は、その……彼がちよつと君みたいなもんだったから」と、ぼそりといった。「たぶん、やっかんでるんだと思う」

エンゲルは気軽にほほえんでみせた。「わかつてるよ」

「僕、彼と特別親しいってわけじゃないけど。でも以前ちよつとだけ聞いたことがあるんだ……家族の事情ってやつがあるとか、そんなようなこと。そういうの、きみのような人にはあまりぴんと来な

いのかもしれないけど、エンゲル」

顔に浮かべたほほえみを、エンゲルはそのままにしておいた。それを返事のすべてとした。このただただ善良でしかない友人が、今のときもそうであるほかに何ひとつ余計なものを持っているわけでないことを、エンゲルはじゅうぶん知っていた。

こういったときは、だまって受け流せばいいのだった。ただし注意深くあることをわすれてはいけない。そうだね、とも、ちがうよとも、言葉を発すべきではないのだった。言葉はすなわちうそになるからである。水を張った水がめにはどんな小さな針の穴すらも開けてはいけないことを、誰か疑う者があるうか。

エンゲルがほほえみをたもっている間に、オリバーはとりつくろうように、さっと口調を変えていった。「ああ！ なんだか僕、いつもよけいなことにはばかり気を回しちまうようだ。ごめんよ、君がなんでもないっていうんなら、データーのことなんでそれでいいんだ、エンゲル。でもまだ後ろを振り向いちやいけないぜ、そうだな、これから教室に入って、席に座るまで。あいつ、まだこっちをにらんでいるからね」

エンゲルはわかったというように、手をあげた。「ところで」「ああ、そうだ。家族といえは、エンゲル」

オリバーはすっかり明るくなって、にこにここと、いつもの調子でこういった。

「夏季休暇には、君ももちろん家に帰るのだろうね、エンゲル？ 僕なんて帰っても弟と妹がうるさくって、夏の間じゅうおもりをさせられるだけなんだ。君のところがうらやましいよ、さぞ」

そこで時間が止まった。

エンゲルは、思わずまじまじとオリバーを見返していた。この一瞬、いったい何を言われたのか、本当にわからなかったのだった。

善良な、悪意ない、何も知らない友人の言った言葉が頭の中で意味を結ぶと、エンゲルはゆっくりと、これまで誰にも見せたことのない顔をつくった。すなわち、彼には非常に珍しい、実に中途半端

な　いつものように念入りに計算して作られたのでない中途半端な失笑を浮かべて、「もう一回言ってくれろ？　夏季　なんだって？」と、たずねるのがせいっぱいだった。自分の耳に届いた自分の声が、まるで自分の声でないように聞こえた。オリバーは少し不思議そうな顔をしたが、すぐに「だから、長期休暇さ」と同じせりふを繰り返したが、その声はもう聞こえていなかった。

聖エルンストには夏の間だけ二ヶ月にもおよぶ長い休暇があるということ、あれほどに周到なエンゲル・ミュラーはこれまで、まるきり頭の端にもものぼらせたことがなかったのだった。

どうかしていたとしか思えない。　夏季休暇！　夏期休暇だつて！

どうして今まで、そのことを一度も考えたことがなかったんだ？　もちろんその間、生徒は学校にはいられない。家に戻らねばならない。戻る家があるのだから。では、帰る家をもっていないものは？

オリバー・デーニッツのガラス玉みたいにすきとおった、無垢な目がいま、きよとんとエンゲルを見つめていた。

空はにごっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9232z/>

アデラード

2011年12月28日23時55分発行